

[連載] 第14回

清々しき人々 月尾嘉男 (東京大学名誉教授・工学博士)

薩摩武士の気概を 後世に伝承した宝暦治水



平田鞠負 (1704-55)

江戸幕府の統治政策

一五世紀末頃から約一〇〇年間継続した戦国時代を終焉させて天下統一を達成した豊臣秀吉の没後、家臣が二派に分裂し、徳川家康が統率する東軍と石田三成を中心とする西軍が激突する「関ヶ原の合戦」が一六〇〇年一月二日に勃発しました。

一五世紀末頃から約一〇〇年間継続した戦国時代を終焉させて天下統一を達成した豊臣秀吉の没後、家臣が二派に分裂し、徳川家康が統率する東軍と石田三成を中心とする西軍が激突する「関ヶ原の合戦」が一六〇〇年一月二日に勃発しました。場所は近江との国境に隣接する美濃国関ヶ原で、双方でおよそ七〇〇の全国の大名、合計二〇万人の兵力が激突する。半日の戦闘で東軍が勝利して決着しました。その功績により一六〇三年に征夷大将軍に任官した徳川家康は江戸を首都とする徳川幕府を開府し、以後二六〇年以上継続する江戸時代が出現しました。しかし、天下二分の戦争の影響で社会は完全に安定していたわけではなく、幕府は様々な対策を実施します。まず東軍に参加した大名などを譜代大名として江戸を中心とする要衝の土地に配置するとともに幕府の要職に抜擢し、それ以外の外様大名を遠隔の土地に配置する国替をします。

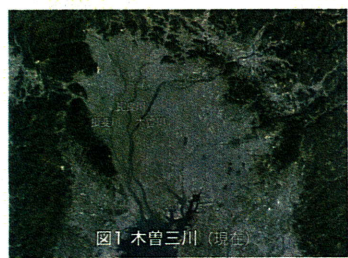


図1 木曾三川 (現在)



図2 当時の木曾三川

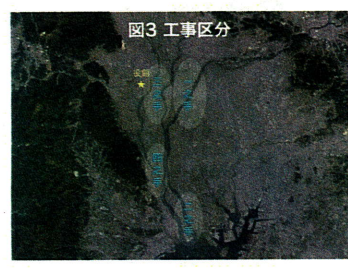


図3 工事区分

難関・木曾三川の治水

日本の河川の延長で七位の木曾川(二二九キロメートル)、一六位の長良川(一六六キロメートル)、三四位の掛斐川(二二キロメートル)の三大河川は最後の二〇キロメートルほどは並行して濃尾平野から伊勢湾内に流入しています(図1)。この木曾三川は現在では堤防で分離されていますが、かつては

網目のように複雑に交差して合流しており、大雨になると毎度氾濫していました(図2)。そのため三本の河川を分流する改修が必要でした。一七三五年に美濃郡代の井沢為水が現地を調査して分流工事を立案しますが、あまりにも巨大な工事のため幕府は許可しませんでした。しかし、頻繁に洪水の被害に見舞われる住民からは何度も幕府に三川分流の嘆願が提出されていました。そこで一七四七年に井沢の計画の規模を縮小した工事が二本松藩に手伝普請として発令されますが、工事が完了しても問題は解決しないどころか、時代とともに土砂が堆積して被害が拡大する一方でした。

薩摩藩士の到着

翌年の一七五四(宝暦四)年一月二日に江戸から先発部隊が出発。二九日に勝手方家老平田鞠負を総奉行、大目付伊集院十藏を副奉行とする本隊が薩摩を出発します。追加された後続部隊も合計すると九四七名という多数でした。平田はしばらく大坂に滞在して金策に奔走しますが、本体は二月九日に到着。ただちに美濃大牧の豪農鬼頭兵内の約四九〇坪の土地を借用し、それ以外の五ヶ所に出張小屋を整備しました。

治水工事を実施する流域は美濃、尾張、伊勢の一三村にもなる広大な範囲で、工事の対象の河川の延長は二一〇キロメートル以上という巨大工事です。そこで全体を一之手、二之手、三之手、四之手、五之手の工区に分割して施工することになり

る。参勤交代を義務とします。このため大名には往来する街道の整備費用、道中の移動や宿泊の費用、国元と江戸の双方の住居の費用などが巨額の負担となり、各藩の国力が次第に弱体になる一方、幕府の権力が拡大していきます。

それ以外に大名の石高を基準にして負担させたのが、天下普請とか手伝普請という名前で実行された土木建築工事でした。建築工事では城郭の建設が有名で、徳川幕府の本拠の江戸城、摂津国大坂城、駿河国駿府城、近江国彦根城、山城国二条城など数多くが築城されました。土木工事は河川改修が中心で、江戸城下の神田川や京橋川の改修工事などがありますが、とりわけ巨大な工事が木曾三川の改修でした。

そのような背景から、一七五三(宝暦三)年末に九代将軍徳川家重の意向により、遠江横須賀藩の藩主で当時の老中西尾忠尚が薩摩藩主島津重年に、幕府の指揮監督による手伝普請で工事を実行することを命令します。しかし、財政が逼迫して巨額の借金がある薩摩藩内では、直線距離でも七〇キロメートル彼方の無縁の土地の工事を命令されたことに激怒する藩士が続出し、幕府と交戦するという強硬意見まで噴出しました。

定義以前

「愛よりもっと深いものが朝と一緒によつてくるのを待った」「ころ」といふのと「わたし」で海を見つめながら(村上春樹)

「定義以前」に夫婦という存在があると考えた大迫さんは、言葉で言葉以前に定着とする。「愛よりもっと深いもの」それは無言の行動のうちにしかない、大迫さんは知っている。 谷川俊太郎

定義以前 大迫弘和 訳 大迫明日奈

季節の話題に合った「珍しい名字」を楽しく紹介! 名字歳時記 季節でたどる名字の話 高信幸男 著

三つのコンセプトで読み解く 新たな東京ヒストリー 全10巻 東京の歴史



図4 宝層治水碑



図5 治水神社と千本松原



図6 薩摩義士碑

幕府との合議により五之手は中止になり、四ヶ所の工区で実施することになりました(図3)。雪解けによる増水以前に工事を開始するため、到着から二〇日もしない二七日に着工します。

### 幕府・農民との軋轢

この工事の主要目的は治水ですが、幕府が工事を薩摩に命令した本意は薩摩を弱体化にすることでしたから、様々な妨害がありました。藩士は分符させ、過酷な労働にもかかわらず食事は一汁一菜に規制されました。地元で調達する労力への賃金は、経験のない農民にも通常より割高に支払うことを要求され、糞笠や草履も幕府の指示により、一般より高値でした。増長した農民は作業の合間に自分たちの田畑の整備まで仕事に組込まれるほどでした。

幕府から派遣されている監督の役人が交代すると、完成した部分を意図して変更させることもあり、さらに夜陰に幕府の役人の扇動で、農民が完成した堤防を破壊することさえありました。このような仕打ちに、工事開始から二ヶ月もしない四月に二名の藩士が抗議の切腹をし、さらに工事完了までに合計六十一名の藩士が自害しています。しかし、幕府への抗議と解釈され、

御家断絶にもなりかねないため、すべて病死と報告されました。地元で住民の増長は監督する立場の人間にも被害をもたらしています。下流の二之手の区域は四月には工事が完成したのですが、地元の庄屋から工事の不備を指摘され、監督であった美濃国高木家の家臣内藤十左衛門は自害したのです。さらなる犠牲の原因は病気で、八月に工事現場で赤痢が流行、一汁一菜という粗末な食事も過酷な労働のため、合計三二名の藩士が病死するという悲惨な事態も発生しています。

### 過酷な工事現場

セメントや鉄材などの素材やブルドーザーやクレーンなどの重機もない時代に、いかに工事が困難であったかを紹介します。一之手の区域は木曾川が美濃と尾張の国境を流下していく場所ですが、水勢を緩和するために、直徑三〇センチメートル、延長六メートルほどの細長い竹籠(蛇籠)に小石を詰込んだものを投入します。

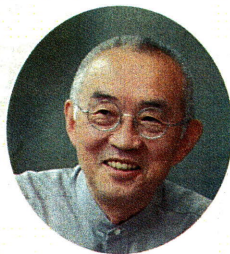
一本の猿尾の構築には推定で四〇〇〇から六〇〇〇の蛇籠が必要とされていきましたから、その用意だけでも大変です。しかも投下しただけでは安定せず、水中に木杭を打込む必要があり、水が、不慣れた武士が急流で水中工事をすることも難行でした。しかし猿尾を構築すると対岸の水勢が加速し、河床の高い木曾川からの低い長川に流入するため、それを不満として夜間に農民が破壊工作をする事例も度々あったといわれています。

雪解けによる増水が顕著になる五月下旬に工事を中断、九月に再開しますが、この期間に何度も洪水により堤防が決壊し、その責任を痛感して三六名の藩士が自害しています。二期工事の最大の難関は尾張、美濃、伊勢三国の境界で木曾三川が合流する四之手の油島でした。木曾川と揖斐川を分流するための約二キロメートルの縮切堤防の構築が必要でしたが、この地点では二本の河川の川底の落差が約三メートルもあり、困難な工事でした。

九月下旬から工事が開始されましたが、その途中で全部を縮切する中間に舟運のための隙間を設定するかが重要な課題になりました。地元の意見との調整ができず、最後は老中首座の堀田正亮の判断により、中間を解放した構造になりました。最初に小石を満載した屍舟を所定の位置まで運搬して沈没させ、運搬した人間が急流を横切つて帰還するという危険な工事でしたが、ようやく翌年三月に完成しました。

工事の開始から約三ヶ月が経過した三月下旬に宝層治水工事全体が完成、四月から約五〇日かけた検査があり、担当した幕吏は「御手伝普請結構な出来致して御座る」と称賛したとされています。すべて完了し、平田朝貞は国許へ工事完成の報告をしますが、四〇万兩(約三〇〇億円)にもなる出費と八五名(自死五二名・病死三三名)の藩士の殉職の責任をとり、翌日五月二十五日に美濃大牧の役館で切腹します。公的には病死とされてきました。

当初、評価されず、顕彰が出現しましたが、一九一七年に「薩摩義士顕彰会」が結成され、二〇年には鹿児島市に平田朝貞を頂点に治水工事に従事した藩士のみならず、幕吏で切腹した内藤十左衛門と竹中伝六をも合祀する「薩摩義士碑」が建立されました(図6)。戦後の一九五四年には平田朝貞の屋敷跡地に銅像が建立され、薩摩武士の意気が永く伝承されるようになったのです。



つぎお よしお

まず東方の朝日に拝礼、ついで西方の家の隆盛を祈念し「住み慣れし/里も今更/名残にて/立ちぞわづらふ/美濃の大牧」の辞世とともに五二年の波乱の人生を終了しました。遺体は山城伏見の大黒寺に、遺髪は薩摩の妙国寺に埋葬されました。さらに藩主周津重年も心労から翌月に逝去しています。薩摩武士の名譽を後世に末永く伝承する「という偉業が衆知されるのは明治時代になってからでした。

明治二六(一八九三)年に、江戸時代には幕府の手前、困難であった藩士の埋葬を快諾した三重県桑名市の海蔵寺で「薩摩藩士埋葬寺送り」という埋葬証文が発見され、事件が衆知されるようになりました。その結果治水の恩恵を享受している三川の下流域で顕彰活動が開始されます。一九〇〇年には千本松原南端に「宝層治水碑」(図4)が建立され、三八年には殉職した藩士を祭神とする「治水神社」(図5)が付近に建立されました。薩摩では膨大な出費と多数の犠牲をもたらした治水事業は、

## 月刊新聞『モルゲン』を定期購読しませんか？

モルゲンは先生と生徒が共有する、読書を柱とした、人間の生き方を考える新聞です。生徒会担当教諭、図書館担当教諭を通して生徒に配布しています。読書や社会情報を通し、子どもたちの視野を広げ、みずから社会の一員である自覚と、ものごとを客観的に見、聞き、考える目と心を育てることを目的としています。

- 媒体種別：月刊紙(毎月1回発行 ※7・8月は合併号) タブロイド判 12~20ページ
- 読者対象：中・高・大・専門学校生、小・中・高校教諭

全国の中学・高校、図書館・青少年センターなどの諸施設 大学・短大・専門学校・サポート校、個人購読者など、教育現場や公共施設などで活用されています

### 購読費(年間購読)

\*年度途中の申込可、送料込\*

300円×11回×1.08(税)

年間11回発行7・8月は合併号

3,564円(税込)

\*一部売りは540円(税込)

★購読費を県費でお支払いいただいている学校さんもあります。県への依頼送付書などはこちらでご用意できますので、ぜひご相談下さい。